

神戸市室内合奏団 定期演奏会

時流を読む者 ― 正統から独創を築き上げた人々 ―

第136回定期公演

戦争と弾圧

ベンジャミン・ブリテン没後40年

メニューヒン生誕100年

2016年10月1日(土) 14:00 開演

神戸新聞松方ホール



助成：文化庁文化芸術振興費補助金
(舞台芸術創造活動活性化事業)



主催：(公財) 神戸市民文化振興財団・神戸市

<プログラム>

B.ブリテン：弦楽の為のエレジー

Benjamin Britten : Elegy for Strings

A.パヌフニク：ヴァイオリン協奏曲(1971年、メニューヒンによる委嘱作品)

Andrzej Panufnik : Violin Concerto

- I. Rubato
- II. Adagio
- III. Vivace

<休 憩>

F.メンデルスゾーン=バルトルディ：シンフォニア 第1番 ハ長調 MWV N1

Felix Mendelssohn-Bartholdy : Sinfonia I C-dur MWV N1

- I. Allegro
- II. Andante
- III. Allegro

B.ブリテン：フランク・ブリッジの主題による変奏曲 Op.10

Benjamin Britten : Variations on a Theme of Frank Bridge Op.10

- I. Introduction and Theme
- II. Variation 1: Adagio
- III. Variation 2: March
- IV. Variation 3: Romance
- V. Variation 4: Aria Italiana
- VI. Variation 5: Bourée Classique
- VII. Variation 6: Wiener Waltzer
- VIII. Variation 7: Moto Perpetuo
- IX. Variation 8: Funeral March
- X. Variation 9: Chant
- XI. Variation 10: Fugue and Finale

プログラム・ノート

中村 孝義

(大阪音楽大学名誉教授・音楽学)

芸術においては、独創性と言うことがよく言われる。確かに芸術行為においては、ただ先人の後をなぞるだけのようなものは価値を認められない。その人ならではのもの、その人しか発想し得ないもの、その時代ならではのものがそこに認められて初めて、その価値が評価される。しかしここで間違っただけではないのが、そうした独自の発想に満ちたものも、決して無から生じたものではないということだ。先人の業績をしっかりと学んだ後、初めてその前提の上に、新しい発想というものが生まれる。そうしたものを知らなければ、何が新しく独自であるかさえ分からないのだから。今年の神戸市室内合奏団のコンセプト「時流を読むもの―正統から独創を築き上げた人々―」の意味は、まさにそこにある。

今回は、そうしたことを成し遂げた芸術家の中で、没後40年を迎えたブリテンと生誕100年を迎えたメニューヒンに光を当て、彼らにまつわる作品が「戦争と弾圧」というタイトルの下に集められた。今ではその認識も徐々に改められつつはあるが、かつてイギリスは、パーセル以来優れた作曲家を生み出し得なかったと言われてきた。しかしそれを打破したのが、他にもない20世紀に登場したブリテンその人であった。彼の名は、20世紀最大の傑作の一つと讃えられる「戦争レクイエム」一つをとっても分かるように、戦争を忌み嫌い、良心的に兵役を忌避するほど強い反戦思想の持ち主であったが、それを音楽で表現することを勧めたのが、彼の師であったブリッジであった。

一方、メンデルスゾーンやポーランドの作曲家パヌフニクが、政治的な弾圧の対象となったことは知る人ぞ知るところである。メンデルスゾーンの父はハンブルクの裕福な銀行家であったが、差別を受けるユダヤ人であることに悩んだ結果、家族に洗礼を受けさせ、ユダヤ教からルター派プロテスタントに改宗している。にもかかわらず、彼を始めとするユダヤ人音楽家が、ナチス政権下においては大きな迫害を受けたことも、忌むべき過去の記憶として残っている。そしてパヌフニクもまた、共産主義政権下では当たり前であった体制宣伝としての作曲を忌避しイギリスに亡命したことから、母国ではその作品の演奏や出版が長く禁止されるという弾圧を受けた。今回は、メニューヒンが彼に委嘱したヴァイオリン協奏曲が取り上げられる。

音楽や芸術というものは、時に俗世を離れた別世界のようなものと思われることがあるが、生身の人間が作り出すものである以上、彼が生きる同時代の様々なものから影響を受けざるを得ないものでもある。その意味で、後世のものがそこから受け取れることも少なくない。今回は、音楽と、時代やその精神との関わりを考える上でも貴重な機会となろう。

B.ブリテン(1913～1976)：弦楽の為のエレジー

Benjamin Britten : Elegy for Strings

1913年生まれのブリテンにとって、その生涯はまさに戦争とともにあったといっても過言ではない。戦争のおぞましさは、結果的に幼いブリテンの心を深く傷つけ、彼の強い反戦思想へと繋がることになる。今日演奏される14歳の時に作曲された「弦楽のためのエレジー」に、そうした思想が顕著に刻み込まれているというわけではないが、そのエレジー（悲歌）というタイトルには、ブリテンという作曲家の原点のようなものが窺えなくもない。比較的最近の伝記的な資料でも触れられていないこの作品は、作曲者が14歳の時の1928年のイースター・ホリデーの1週間の間に、まさに音楽という大海に船出していこうとした時に作られた記念すべき作品の一つである。ブリテンの最初によく知られた作品である「シンフォニエッタ作品1」に先立つ多くの原稿の中から発見された。この作品の作曲後すぐから、彼はフランク・ブリッジについて作曲の勉強を始めており、師の指導を得て、来るべき時代に「戦争レクイエム」や「ねじの回転」などで開花する彼のすばらしい着想をもった音楽的才能が、ここにはすでに暗示されている。タイトルに示された「悲歌」的な雰囲気よりも、むしろエネルギッシュな力が横溢する作品で、若さゆえにタッチは少し粗いが、書法の点ではすでに熟練と豊かさを示すなかなかの力作である。

A.パヌフニク(1914～1991)：ヴァイオリン協奏曲 Andrzej Panufnik : Violin Concerto

パヌフニクといっても、わが国では未知に近い作曲家だが、1914年にワルシャワで生まれたポーランドの作曲家である。ウィーンやパリで研鑽を積んだ後、戦中、戦後とポーランドを代表する指揮者、作曲家として活躍したが、1954年に政治的理由によりイギリスに亡命。その後はバーミンガム市交響楽団の音楽監督を務めるなどしたが、次第に作曲に活動をシフトし、故郷ポーランドと関係の深い作品を数多く世に送り出した。

今日演奏されるヴァイオリン協奏曲は、1971年に彼の友人であったメニューヒンからの委嘱によって作曲された。パヌフニクにとっては、母が優秀なヴァイオリニストであったことや、父が弦楽器製作者であったことからヴァイオリンという楽器には子供時代から親しみをもっていたため、作曲にはさほど時間はかからなかったようだ。この作品における彼の意図は、温かい表現を持つ楽器としてのヴァイオリンを示すことにあったようで、実際に表現の深さやヴァイオリンの音の美しさが精一杯繰り広げられており、その洗練された音の世界は、聴くものを魅惑せずには措かない。そしてそれはまた父や母との子供時代の思い出に強く結びついていたようで、作曲はポーランドの雰囲気詰まった自分の過去への一種の巡礼の旅になったと、彼自身が後年語っている。

形式的には伝統的な3楽章形式をとるが、各楽章の内的構造はそれぞれ独自の方法で作られている。パヌフニクがいうポーランドの雰囲気は、特に最後の楽章で、「オベレク」と呼ばれる民族舞曲のリズムを使うことや、第2楽章の叙情的で愁いを帯びた表情で表現されている。1972年7月18日に、ロンドン音楽祭の期間中にメニューヒンのヴァイオリンと作曲者の指揮で初演された。

F.メンデルスゾーン=バルトルディ(1809～1847)：シンフォニア 第1番 ハ長調 MWV N1 Felix Mendelssohn-Bartholdy : Sinfonia I C-dur MWV N1

普通メンデルスゾーンには5曲の交響曲があることが知られている。第1番をのぞいてどの曲も結構な演奏頻度があり、初期ロマン派を代表する交響曲といっても過言ではない。これらは、メンデルスゾーンが25歳から43歳にかけての、まさに円熟した時期に作曲したものであった。しかし彼には、実はこれらの交響曲の作曲以前に、「シンフォニア」と呼ばれる曲が13曲も存在している。これらは作曲後長い間忘れられていたものであったが、1950年に東ベルリンの国立図書館で発見され日の目を見ることになった。シンフォニアという術語も、日本語に訳せばもちろん交響曲なのだが、これらは弦楽器のみで演奏されるもので、メンデルスゾーンの意識の中では、ウィーン古典派によって完成された交響曲をイメージするよりも、それ以前のイタリア風の序曲から派生したシンフォニアをイメージしていたのではなからうか。全13曲のうち第6番までは、彼がわずか12歳の時に作曲されたもので、基本的には急緩急の3楽章構成からなっている。第1番から第4番までは、両端楽章がアレグロ、中間楽章がアンダンテとなり、調構成も中間楽章が平行調をとる。

このハ長調をとる第1番では、基本的には大バッハやハイドン、モーツァルトなどからの影響も見られない訳ではないが、第1楽章や第3楽章などでの表出的で劇的な曲調を考えると、彼が根ざす北ドイツにおいて生み出されたC.P.E.バッハあたりのシンフォニアを念頭に置いていたといえるかもしれない。また第2楽章アンダンテでは、主部のイ短調によるメランコリックな音調と、イ長調による中間部の爽やかに流れる音調が実に美しいコントラストを描いている。いずれにせよ、わずか12歳頃の手になるものとはとても思えない作品で、メンデルスゾーンの早熟ぶりを表す例の一つといえよう。

B.ブリテン：フランク・ブリッジの主題による変奏曲 Op.10

Benjamin Britten : Variations on a Theme of Frank Bridge Op.10

人間にとって出会いとは極めて重要である。どんな人と出会い、どんなものと出会うかが、その人の一生を左右するといっても決して過言ではない。ブリテンは非常に早くから音楽に関心を示すと同時に、並々ならぬ才能の持ち主であった。すでに音楽のレッスンを受けていたとはいえ、わずか10歳の頃、彼はコンサートでブリッジが作曲した交響組曲「海」を聴いてショックを受ける。演奏会后ブリッジに会ったブリテンは、おそらくその感激を告白したに違いない。すぐにレッスンを受けることにはならなかったが、3年後の13歳の時からブリッジにつき、本格的な作曲の勉強を始める。ブリッジもこの弟子の音楽的才能が特別であることをすぐさま認識し手厚い指導を行った。

この出会いこそがブリテンという類希な作曲家を生み出すことになる。その後約10年の修行を経てその能力が評価され、1937年にあのザルツブルク音楽祭から作曲の委嘱を受けるが、そのとき作曲したのがこの弦楽オーケストラのための作品であった。そのスコアには「感動と賛美をもって、フランク・ブリッジに捧ぐ」と献呈の辞が添えられているが、まさに二人の出会いと師弟の深い絆がこの作品に結実したといってもよいだろう。

作品は序奏につづいてブリッジの「弦楽四重奏のための3つの田園曲」の第2番から採られた主題が提示される《序奏と主題》に始まり、その後①アダージョ②行進曲③ロマンス④イタリア風アリア⑤古典的なプレー⑥ウィнна・ワルツ⑦無窮動⑧葬送行進曲⑨聖歌と名付けられた9つの変奏と、最後にフーガとフィナーレが置かれている。どの変奏もブリテンの魅力的な着想と鮮やかな作曲技法が冴える見事な音楽で、この作品をもって彼が一躍国際的な名声を得ることになったのも当然のことであった。

指揮 リューディガー・ボーン
ヴァイオリン アレクサンダー・シトコヴェツキー

コンサートマスター 白井 圭
第1ヴァイオリン 前川 友紀 谷口 朋子 幸田 さと子 黒江 郁子 萩原 合歓
第2ヴァイオリン 西尾 恵子 井上 隆平 奥野 敬子 中山 裕子 二橋 洋子
山本 美樹子
ヴィオラ 亀井 宏子 横井 和美 中島 悦子 北村 聡至
チェロ 伝田 正則 田中 次郎 山本 彩子 池村 佳子
コントラバス 長谷川 順子 南出 信一

<プロフィール>

指揮 リューディガー・ボーン Rüdiger BOHN

ドイツ、リュベック生まれ。ピアノと指揮をケルン音楽大学とデュッセルドルフのロベルト・シューマン音楽大学で学ぶ。ピアニストとしてはフィレンツェとボルドーのコンクールの他、数々の室内楽コンクールで優勝。ピアニストとしての活動を行う。その後、レナード・バーンスタイン、セルジュ・チェリビダッケ、ジョン・エリオット・ガーディナーのマスタークラスを受けた後、指揮に専念する。ブリュッセルのモネ劇場にて音楽監督助手を務め、バーゼルとリュベックの歌劇場の首席指揮者となる。

また、ナンシー歌劇場、ダルムシュタット国立劇場、ボローニャのテアトロ・コムンナーレ、RAI管弦楽団、スイス・ロマン管弦楽団、ローザンヌ室内管弦楽団などの客演指揮を行う。特に新しい音楽に関わりが深く、オーストリアの現代音楽アンサンブル「クラングフォルム・ウィーン」と「ワルシャワの秋」や「ザルツブルク音楽祭」に出演。また自身が創設した現代オペラ・ベルリンの音楽監督も務め、ヘンツェ、カーゲル、バティステッリ、フェルドマン、ライマン、ヘルスキー、シャリーノ、マクスウェル・デイヴィス、リームらによるオペラを現代オペラ・ベルリンにて上演している。その他、ミュンヘン・ビエンナーレとの共同制作でチュー・シャオソン(QuXiao-song)によるミュージックシアター作品、ベルリン・コーミッシュ・オペラとの共同制作でツェンダーのオペラ「ドンキホーテ」を上演した。

これまで韓国交響楽団、ソウルフィルハーモニック管弦楽団、ドイツ=ポーランド現代音楽アンサンブル、アンサンブルTIMFも客演指揮。昨年11月に引き続き、今年7月の第九演奏会での斬新で壮快な演奏は記憶に新しい。

2005年よりデュッセルドルフのロベルト・シューマン音楽大学指揮科主任教授。



©Susanne Diesner

ヴァイオリン アレクサンダー・シトコヴェツキー Alexander Sitkovetsky

ロシア・モスクワ出身。8歳でソロ・デビューし、ユーディ・メニューヒンに見出される。同年メニューヒン音楽院に迎えられ、氏と度々共演し最後の弟子として薫陶を受けた。ロンドンのロイヤル・アカデミーを経て、現在ソリストとして世界各地のオーケストラと共演を重ね、今シーズンはブリュッセル・フィルハーモニック、サンクトペテルブルク・フィルハーモニー交響楽団、ロイヤル・フィルハーモニー管弦楽団等と演奏する。日本での協奏曲演奏は2007年の神戸市室内合奏団、2015年の読売日本交響楽団に続き3回目である。2014年にベルリン・コンチェルトハウス管弦楽団と演奏したA.パヌフニクのヴァイオリン協奏曲はCPO からCDがリリースされており、今シーズンは同曲でノルウェー室内管弦楽団やリガ・シンフォニエッタ等とも共演する。

室内楽の演奏活動にも積極的で、2011年「プレミオ・トリオ・ディ・トリエステ国際室内楽コンクール」(伊)で優勝し、リンカーン・センター(米)の“Lincoln Center Emerging Artist Awards 2016”に選出されているほか、ユリア・フィッシャーのプロジェクトなどにも参加している。また2011年にはシトコヴェツキー・トリオを結成し、2014年にはBISレコードからデビューアルバムがリリースされた。ピアノのウー・チェンに加え、2016年夏よりチェロに石坂団十郎を迎えて新たなスタートを切る。またピアノ四重奏団「アンサンブル・ラロ」のメンバーとして2007年より毎年来日し、ヘーデンボルク・直樹が音楽顧問を務める神戸国際芸術祭などに出演している。英国在住。

公式HP <http://www.alexandersitkovetsky.com/>



神戸市室内合奏団

Kobe City Chamber Orchestra



1981年、神戸市によって設立された神戸市室内合奏団は、実力派の弦楽器奏者たちによって組織され、神戸、大阪、東京などを中心に、質の高いアンサンブル活動を30数年に亘って展開している。弦楽合奏を主体としながらも、管楽器群を加えた室内管弦楽団としての活動も活発で、バロックから近現代までの幅広い演奏レパートリーのほか、埋もれた興味深い作品も意欲的に取り上げてきた。また定期演奏会以外にもクラシック音楽普及のための様々な公演活動を精力的に行っている。

1998年、巨匠故ゲルハルト・ボッセを音楽監督に迎えてからの14年間で演奏能力並びに芸術的水準は飛躍的な発展を遂げ、日本を代表する室内合奏団へと成長した。毎年のシーズンプログラムは充実した内容の魅力あふれる選曲で各方面からの注目を集め、説得力ある演奏は高い評価を受けている。

内外の第一線で活躍するソリストたちとの共演も多く、2011年3月の定期演奏会でのボッセ指揮によるJ.S.バッハ「ブランデンブルク協奏曲全6曲」の名演のほか、メンデルスゾーン「第三交響曲スコットランド」、ベートーヴェン「第四交響曲」などがCD、LPとしてリリースされている。また、2011年9月にはドイツのヴェストファーレンクラシックスからの招聘を受けてドイツ公演を行い、大成功を収めている。2013年度からは、日本のアンサンブル界を牽引する岡山潔が音楽監督に就任し、ボッセ前音楽監督の高い理念を引き継ぎ、合奏団のさらなる音楽的発展を目指して、新たな活動を展開している。